

【 宮城県塩竈市の方言概観 】

ここでは、今回の会話集に現れた特徴を中心に、伝統的な塩竈市方言の音声や文法を概観します。

㉑ 音 声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは平たく言えば、単語の頭以外にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になることです（専門的に言えば、（有声）母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になること）。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば柿は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

この特徴は、今回の会話集の話者たちにもかなりよく保たれているようです。例えば、カ行音については、「ダガラ」（だから）、「ユギ」（雪）、「ハヤグ」（早く）、「フンズゲダ」（踏みつけた）、「ヒドゴド」（一言）、また、タ行音については、「イダ」（居た）、「コドモダジ」（子供達）、「ネズ」（熱）、「トッテデ」（取っていて）、「ヒドゴド」（一言）、といった例が聞かれます。

ただし、完全にガ行やダ行に濁るのではなく、共通語の発音よりはやや濁っているといった程度の発音も多く聞かれます。それら軽度の有声化音も、文字化資料ではガ行・ダ行の文字で表示してあります。

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルになってしまい、「上げる」と混同しそうですが、「上げる」のほうはゲが鼻にかかった音（鼻濁音とも言い、この現象を鼻音化と言います。ここでは「ヶ°」のように半濁点で表記

します) のアケ° ルとなり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ° ル

で両者の混同は起こりません。

今回の会話集の話者たちもこの特徴を持っています。例えば、「シオカ° マ」(塩竈)、「カイキ° 」(会議)、「タマケ° タ」(驚いた)、「タコ° マル」(絡まる)のような発音が聞かれました。ただし、鼻にかかっているのかいないのか微妙で、聞き取りの難しいケースも多くありました。そうした問題を含むものの、文字化資料では一律に鼻濁音で表記してあります。

以上のガ行に加えて、ダ・ザ・バ行も鼻音化します(ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します)。

例) ガ行：上げる → アケ° ル
ダ行：肌 → ハンダ
ザ行：風 → カンゼ
バ行：首 → クンビ

これらは衰微が著しく、高年層からも聞かれないことがあります。

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象(またはその逆も)を「中舌化」(ちゅうぜつか、なかじたか)と言いますが、宮城ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどが互いに近い音になります*。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」と発音され、これらは区別がありません。

例) 獅子(しし)、煤(すす)、寿司(すし) → すべてスス
知事(ちじ)、地図(ちず)、辻(つじ) → すべてツンズ

※ただし、母音単独のイだけはエに統合されます(後述)。

ただし、現在ではこの中舌化の特徴も弱まりつつあり、シとス、ジとズ、チとツが、似た発音ではあるものの一応の区別はなされている、という段階に入りつつあります。共通語とあまり変わらない発音が聞かれることも多くなっています。今回の会話集の話者からもあまり聞かれず、この会話集の文字起こしの範囲ではありませんでした。

▼シュ、ジュ、チュの直音化

シュが「ス」、ジュが「ズ」、チュが「ツ」と発音される。

☞これに上記の中舌化も合わせると、シ・ス・シュがすべて「ス」、ジ・ズ・ジュがすべて「ズ」、チ・ツ・チュがすべて「ツ」という発音となります。

例) 爺さん (じいさん)、十三 (じゅうさん) → 両方ともズーサン
手術 (しゅじゅつ) → スズツツ
注射 (ちゅうしゃ) → ツーシャ

ただし今回の会話集で文字化をした範囲にはこれらの現象は見られませんでした。

▼キ (キャ行) の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と似たように発音される。

☞一般的にはこれは「口蓋化」の一種と見られています。口蓋化とは舌の前の部分が上あご (硬口蓋) に接近する現象を言います。キがキとシの間のような音になるという、似た現象は東北一般で見られますが、宮城では極端な口蓋化が起こってチに近くなります。

例) 機械 (きかい) → チカイ
救急車 (きゅうきゅうしゃ) → チューチューシャ
今日 (きょう) → チョー
来た (きた) → チタ

上の例では、「チ」と表記しましたが、塩竈では完全にチになるのではなく、キのあとにシの発音を添えるような微妙な音になることが多いようです。今回の会話集の話者たちにもこの特徴は見られ、「チテチタ」(着て来た)のような例が聞かれます。しかし、概してこの傾向は強くは現れていません。

▼その他、以下のような特徴もあります。

・ヒの音がシに近い音となる。

例) ヒト (人) → シト

【母音】

▼イとエの統合

母音単独のイとエの区別がなく、エに統合されている。

例) 息 (いき)、駅 (えき) → 両方ともエギ
鯉 (こい)、声 (こえ) → 両方ともコエ

ただし、この特徴も弱まってきており、イとエが似たような発音になるものの、完全に同じではなく、一応区別はするという状態になりつつあるようです

▼連母音の融合

アイ・アエという母音の連続(連母音)は融合して[ɛ:](共通語のエー[e:]よりも口を開いて発音する)と発音される。

¶ アクセント

塩竈市は、「曖昧アクセント」と呼ばれる地域に属する。

☞例えば「橋」と「箸」を声に出したときに、共通語のような「有型アクセント」ではハとシの音の高低が決まっています(=型が有る)、それによって単語の区別が付きませんが、「無型アクセント」では高低が決まっていない(=型が無い)ため、区別されません。例えば、今回の調査の話者は、「牡蠣」と「柿」、「橋」と「箸」など、一部の語では、アクセントの区別がされていませんでした。このような曖昧なアクセントを持つ地域のことを、一般に曖昧アクセント地域と呼びます。

¶ 文法

【格助詞】

▼共通語の「が」、「を」の不使用

共通語の「が」格、「を」格が無助詞で表示されることが多い。

☞共通語の「が」のような主格を表す助詞や、「を」のような目的格を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることが多いです。

例) 主格 : 俺 行く (俺が行く)

目的格: 酒 飲む (酒を飲む)

今回の会話集の話者たちからも、「ヒト トーレルクレーノ ハバニスッカラワ。」(人 [が] 通れるくらいの幅にするからよ。), 「ズンツァンダジ ヨグ ツカッテタケドー。」(爺ちゃん達 [が] よく使っていたけど), 「カゼ ヒーダッテ キーダゲッドモ」(風邪 [を] 引いたって聞いたけども), 「ウジサ イッテ モノモラッテー」(家に行つて物 [を] 貰つて)、 「シンケーシツミタイナヤツ ケンノンタガリツツーンダヨナ」(神経質みたいなやつ[を]ケンノンタガリっていうんだよな。) などのように、「が」や「を」を使わない発話が聞かれました。

☞また、この会話には見られませんが、宮城県内では共通語の「を」相当のものとしては「バ」や「ドゴ」が用いられることもあります。

例) 酒バ飲む (酒を飲む)

俺ドゴ連れて行ってくれ (俺を連れて行ってくれ)

▼「サ」

「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところも多くあります。今回の会話集では次のような例が見られました。

例) ウジサ イッテ モノモラッテー (家に行つて物 [を] 貰つて)

ドッカサ デンノ (どこかに出るの)

ビョーインサ イッテ ミデモラッタホーガイーヨ、ハヤグ (病院へ行つて見てもらった方がいいよ、早く)

ただし、「サ」は共通語の「に」ほど広い意味をもっているわけではありません。微妙なのは存在の場所を表す用法であり、今回の会話集でも、「ア ソゴサ アッガラ モッテッテエーヨー」(あ、そこにあるから持つて行っていいよ) のように「サ」を使った発話例が聞かれる一方、「ンジャ ソコニ オイデデクダサイ」(それではそこに置いておいてください) のように「サ」を使わず「ニ」を用いた発話例もあります。塩竈市では、もともと「～サ ある」という言い方はしませんでした。が、しだいに、そのような言い方をするようになってきたものと考えられます。

【接続助詞】

▼「ケ」

共通語の「けど」などに当たる接続助詞に「ケ」がある。

☞次の例文の「ケ」は「けど」と訳せるものです。しかし、「ケ」にはほかにも、「のに」「たら」「ところ」などさまざまな共通語訳があてられるように、必ずしも逆接になるとは限りません。「この間、町に行ったっケ、友達に会った」（町に行ったら）のような用法もあります。この「ケ」には、あることがらを思い出すという意味合いがあり、その思い出したことがらを前提にどうであるかが「ケ」の後ろで語られます。

例) イギナリ フンズゲダッケ コワレデシマッダワ（ひどく踏みつけたから壊れてしまったよ）

▼「ゲットモ」

共通語の「けれども」に当たる接続助詞（逆接既定条件）に「ゲットモ」がある。

例) モーースワケネーゲットモ スコップ カシテケネーガヤ（申し訳ないけれどもスコップ貸してくれないかな）

【助動詞】

▼「ベ」

共通語の「～だろう」（推量）や「～しよう」（意志）に相当する助動詞に「ベ」がある。

☞「ベ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

例) 明日、雨だベ（明日雨だろう）	<推量>
明日は早く起きッペ（明日は早く起きよう）	<意志>
お祭り、お前も行くベ？（お祭り、お前も行くだろう？）	<確認>
みんなでがんばッペ（みんなでがんばろう）	<勧誘>

今回の会話集では、「ドノクライ カカンダベ」（どのくらいかかるんだろう）などの形で推量する用法が見られます。また、「ナンダベー セッカク カッタノニー」（何だろう せっかく買ったのに）などのように、「ナンダベ」の形で感動詞風に使う発話

も聞かれます。

▼「タ」「タッタ」

「タ」は共通語の過去・完了の助動詞「た」よりも用法が広く、現在目の前にあることの確認などにも使われる。

例) (私は今、) 学校にいる → 学校にイタ
(私は今、) 手紙を書いてる → 手紙をカイテタ

また、「タッタ」は過去の思い出など、現在と切り離された過去で用いられる。

☞「タッタ」は、「タ」と比べて過去の出来事が発話時に存在する場合には使われにくく（この場合は「タ」が用いられます）、過去の出来事が発話時に存在しない場合に使用しやすくなります。これを上記では「現在と切り離された過去」と表現しました。

以下の例で説明すると、①は昨日もらった桃が今もあるときの発言であり、これは過去の出来事が発話時に存在すると読みとることができます。このような場面では「タ」が使われます。②は昨日もらった桃が今はもうないという状況であり、これは過去の出来事が発話時に存在しないと捉えられます。このとき、「タッタ」が用いられます。

例) ①きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタ。あんたも食べる？
②きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタッタ。
あんたが来るなら少し残しておけばよかったなあ。

<例文は竹田（2011）より引用>

【終助詞】

▼「シャ」「ノッシャ」

共通語の「さ」にあたる終助詞として「シャ」が用いられる。「のさ」にあたる「ノッシャ」もよく聞かれる。

☞共通語にはうまく訳せない程度の軽い敬意を含んでいることもあります。

例) センダイデ カイコ[°]ー アンノッシャ（仙台で会合 [が] あるんだよ）

▼「チャ」

共通語の「だろ」「じゃない（か）」「よね」などにあたる終助詞として「チャ」が用いられる。

☞相手が知っているはずだ、当然わかるはずだ、と思う事柄を示し、相手に確認させる機能があります。今回の会話集では、次のような例が聞かれます。

例) ソコ チョスナーッテ イウッチャ ヨグ (そこ「ちょすなー」って言うよね よく)

▼「ワ」

共通語の「な」「ね」「よ」「わ」などにあたる終助詞として「ワ」が用いられる。

☞共通語と異なり、男性も使用します。しかも、比較的自由に文末に付きます。例えば、「学校さ行ったかワ」「まだ居たのワ」「もう行って来たよワ」など、「か」「の」「よ」といった助詞の後ろにも付きます。「もう居ないべワ」のように「べ」にも接続します。さらに、「早く行けワ」のように命令形式に付くこともあります。この「ワ」に共通するのは、話し手が、自分に自信があり、当然のことを言っていると感じている場合のようです。

例) ヒト トーレルクレーノ ハバニスッカラワ (人 [が] 通れるくらいの幅にするからよ)
イギナリ フンズゲダッケ コワレデシマッダワ (ひどく踏みつけたから壊れてしまったよ)

▼「オンネ」

共通語の「もんね」にあたる終助詞として「オンネ」が用いられる。

例) ウン、ワカッテダ。アシタダオンネ (うん、わかってる。明日だものね)

▼「ゴダ」

感動を表す終助詞として「ゴダ」が用いられる。

例) ア タイヘンダゴダ (あ 大変だなあ)

【敬語】

▼「ス」「(デ) ガス」「(デ) ゴザリス」「ゴザリシタ」「イ (ン)」

敬意を表す形式として「ス」「(デ) ガス」「(デ) ゴザリス」「ゴザリシタ」「イ (ン)」などが用いられる。

例) 取りス (取ります)

んデガス (そうです)

おはよゴザリス (おはようございます)

ありがとうゴザリシタ (ありがとうございます)

ウチサ ヨッテガイン ([私の] 家に寄っていきなさい)

▼テケサイン

共通語の「てください」にあたる補助動詞として「テケサイン」が用いられる。

例) カンジョシテケサイン (お勘定してください)

【参考文献】

加藤正信 (1969) 「東北方言概論」『言語生活』210

加藤正信 (1992) 「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院

国立国語研究所編 (1981) 『国立国語研究所資料集 10 方言談話資料 5 岩手・宮城・千葉・静岡』秀英出版

佐藤亨 (1982) 「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

竹田晃子 (2011) 「テンス形式および文末の「ケ」の用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿岸地域方言の研究』東北大学国語学研究室

東北大学方言研究センター (2012) 『方言を救う、方言で救うー3.11 被災地からの提言ー』ひつじ書房